



シリーズ名 認知機能低下の血清バイオマーカー探索用データベース

氏名・所属・役職 庄司 哲雄・医学研究科 血管病態制御学・准教授

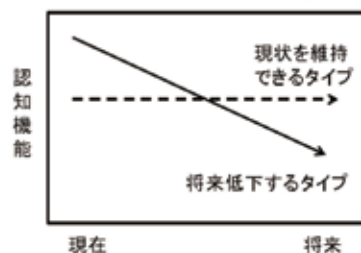
<概要>

超高齢化が進むわが国において、認知症はますます重要度の増す病気である。認知症予防のためには、ある時点での認知機能を決定する因子ではなく、今後の経年的な認知機能低下を予測する因子（危険因子）を同定することが大切である。そのためには、認知機能を経年的に繰り返し測定し、その低下の様子を予測する研究が必要となる。

透析患者を含む慢性腎臓病（CKD）患者では、健常者に比較して、認知機能が低下していること、およびその低下速度がはやいことが報告されており、認知機能研究が望まれ、また結果が早く得られると見込まれる対象集団である。

本シリーズは、特定のバイオマーカーではなく、バイオマーカーを探索するためのデータベースであり、維持血液透析患者 1697 人からなる Osaka Dialysis Complication Study (ODCS) というコホートで、2012 年度に採血した血清が-80℃で保存されている。2012 年以降 5 年間、毎年認知機能を検査する計画であり、2012 年度は 1200 人以上の患者さんの認知機能が記録されている。

認知機能の「現状」より「将来の低下」を予測することの重要性



<アピールポイント>

認知機能は、日本で普及している長谷川式（HSD-R）、国際的にも利用されている MMSE、3MS の 3 通りで点数化されている。その他のデータとしては、年齢、性別、透析年数、腎不全の原疾患、透析条件、既往歴、主なラボデータ、定期処方リストなどがある。心血管疾患、骨折、感染症入院などのアウトカムも同時に記録しているので、それらの発症を予測するモデルも構築できる。

<利用・用途・応用分野>

- ・認知機能低下リスクのスコア化
- ・認知機能低下予測バイオマーカーの探索

<関連する知的財産権・引用文献・学会発表など>

庄司哲雄、他「慢性腎臓病・透析患者における認知機能低下」第 33 回日本認知症学会学術集会 シンポジウム 5、横浜、2014/11/29

<関連する URL >

UMIN-CTR「透析患者における認知障害の実態と心血管疾患・日常生活活動度との関連」Osaka Dialysis Complication Study (ODCS),
<https://upload.umin.ac.jp/cgi-open-bin/ctr/ctr.cgi?function=brows&action=brows&type=summary&recptno=R000008813&language=J>

<他分野に求めるニーズ>

なし

キーワード

認知症、認知機能、予測モデル、バイオマーカー、慢性腎臓病、透析